

侘茶の素因

京都工芸繊維大学名誉教授 相 川 浩

はじめに

侘茶の侘という言葉の元来の意味を探るのが目的である。言葉はどうも、感情と違い、一度通用すると意味の通じる時代が長い。それに対して感情は生活の変化に伴い変化が早いように思う。言葉が感情と共感しないと、「えも言われぬ美しさ」などと言われる。

感情が生活と合わぬと、すぐ忘れ去られる。

いいたいのは、侘茶の侘という言葉が、茶の湯の点前の総合感とは、別の歴史をたどるから、それを三つの名歌の詞（歌詞）の時代に分けて、それぞれの代表的和歌（長歌や俳句、連歌でなく）を具体的に解釈し、茶の湯を支えた茶道具の物の鑑定から入る珠光の茶の湯評論とは違う評論に向けて言葉と感情とがいわば共鳴したときの秀歌を手掛りに、「わび」の意味を探ることである。（詠歌の方法論は除く）

言葉と感情と時代が裏の主題でもある。

1. 『古今和歌集』（西暦 905、以下同）

唐末期戦乱のため二世紀半ほど続いた遣唐使廃止。多くの文化とともに、中国の漢詩も日本人に親しまれていたものを、日本語読みにしたため唐歌と言われ、和歌集から除かれる。他面、五・七・五・七・七の音数と平仮名の普及もあって、万葉集の古歌から当代の歌まで文字通り古今の秀歌を勅令により撰別編集。一千首の予定が一千百首も撰入された。この史実『古今和歌集』は和歌としてこれ以上分割できない基本的原因（筆者仮稱・素因）の第一歩を築いたと思う。

具体的にも、歌は言葉で言いつくせない感情を読む者に感じさせる…と『古今和歌集』（以下、慣例により『古今集』と略称）の仮名序で書き…今の歌は下落し、古き良き歌を基準として撰別したことを後世の人々は羨むほどでありましょう（大意）と書いた。この序を誰が書いたか未定説であるが、後世からの追加文でないことは確認されている。

『古今集』の撰歌、編集の中心的人物の和歌で、自他ともに代表作と認める歌がある。¹⁾

この歌には、本人の書く前書、詞書が付いている。それが珍しく長文なので、要点をたどると、或る宿に自分の古里でもないのに寄った。そこで宿の主人が馴れなれしく「お宿はとってありますよ」と話しかけた。（都の裏通りの客引きのように下品なあつかましがこんな田舎にも流行し始めたか）それで植えてあった梅の花を一枝折って与えた。（他の花ではなく）そこで詠んだ歌—紀貫之—（ここまでの詞書はもう歌の趣向を暗示）

人はいさ^{ひと}心^{こころ}も知らずふるさと^しとは花^{はな}ぞ昔^{むかし}の香^かににほひける（古今集撰歌通番号 四二）

歌の緊張度はすごい。「人はいざ心もしらず」を普通に書けば「人の心もいざしらず（当時の用語「いざしらず」は「よくは知らないが」の意味で他の例も『古今集』に示している）しかし普通に書くと次の「ふるさと」とのつながりが弱い。古里一般の話になるだろう。歌の緊張感がまるで違う。後の句の「花ぞ」は歌全体の主語であるのに、強調しながら何の花かは言わない。（詞書^{ことばがき}を思い出させる）「昔^{むかし}の香^か」で、はじめて具体的な詞がでてくる。この三字は血を見るように鮮明で強い。

ただし、「昔の香ににほひけり」では強く、どこか懐かしい個人の思い出になる。強い詞と暖かい感情とを突きつける？この一瞬の感情の慎みが、最後の一文字で「り」を許さず、「る」となった。理由は次の点にあらう。

菅原道真^{すがわらのみちざね}が讒訴^{ざんそ}によって太宰権帥^{だざいごんのそち}に流されたのが九〇一年。有名な「東風吹かばにほい^{こち}おこせよ梅の花主^{あるじ}なしとて春な忘れそ」の歌を残して没したのが九〇三年。『古今集』は九〇五年完。貫之が二人で梅の昔^{むかし}の香^かをにおった楽しさを思い出して一瞬、やさしい気になり、その感情のゆらぎに従って（正直に慎しみ）なお苦吟した結果「る」に思い当った。歌は末尾の助詞が一字変わるだけで、すずやかな三人称の情景となった。そして、菅原道真の客死を知った京童^{わらべ}が天変地異を道真卿^{うらみ}の怨^{たたり}の祟^{たたり}とさわいだ時に黙って「…にほひける」におさめ道真への供養にしたと思う。

この歌は言うに言われぬ余情に正しさの感情を引き込んでいる。『古今集』の誇りの素因に应じている。

『古今集』に「わび」の語はなかったか。

わびの動詞形「わぶ」を詠んだ歌が二首入撰している。言葉の意味は、万葉集以来全面的に用いられた古語で、「泣く」、涙を流して悲しむ感情を表わすものであった。

二首のうち有名^{ありわらのゆきひら}になったのは在原行平作

わくらばに問う人^とあらば須磨^{すま}の浦^{うら}に藻塩^{もしお}たれつつわぶとこたえよ（古今集 九六二）

この歌は、塩作りの藻^もに海水かけまでする哀愁の情を、わぶという衆知の古語で忘れ難くしている。この点が後世まで注目された。（定家の『詠歌大概』でも秀歌に引用されている。³⁾

しかし身分の高い貴族が、辺鄙な土地に身を引くことで罰を逃れた史実を、源氏物語が真似して、「行平^{ゆきひら}が塩を作った近くに…光源氏が逃れ、都に置いてきた姫たちを思い、泣き明かした」とする。そのため、「わぶ」は泣くだけでなく失恋する感じ等に多用、（粹な当代語に）され始めた。「わぶ」は茶の湯どころか、泣く意味からも縁遠くなった。もちろん消滅はしないが言葉も文学的な夢物語にされている。

2. 藤原定家(定家)新風

二五才にして新風を公表。後に『新古今和歌集』(1205、以下『新古今集』)の中に、撰者で編集者の一人となった定家が並べた歌がそれで、有名な三夕の一つ。⁴⁾

さびしきさはそのいろとしもなかりけり
まきた やま あき ゆうぐれ — 寂蓮法師 (新古今集撰歌通番号 三六一)

こころ なきみにもあわれはしられけり
しぎ た さわ あき ゆうぐれ — 西行法師 (新古今集 三六二)

ことばがき 詞書、西行法師が、すすめて、百首の歌を詠ませました時に
み はな も み じ
見わたせば花も紅葉もなかりけり
うら とま や あき ゆうぐれ — 藤原定家 (新古今集 三六三)

上の三歌のうち、最後の和歌が定家二五才の初公表の歌で、『新古今集』に他の著名歌人の二首と並べて自作を問うている。二首は古い型の歌で、初めの五・七・五で主題を書き、後の七・七でそれを感じた実情歌を添えた。寂しさや、あはれの言葉と、槇山や沢の想像雰囲気直結による新鮮さ。一方定家は、「見わたせば」と『古今集』の歌の一部⁵⁾を引用し都の春を偲ばせ「花も紅葉もなかりけり」と嘆き、春も秋も一年たっても何一つない、と詠う。平家の滅亡後一年、古戦場の総合感。見わたす限りの荒野の中に、たった一つ、求めていた人の言葉と感情の共鳴体・浦の^{とまや}苦屋を見出した。人が働いている。二重の無もまた、小さい実情歌に救われる。

なお定家の^{ことばがき}詞書に、西行法師…百首の歌…とあるのは西行が晩年、歌人達に『^{ふたみがうら}二見浦百首』を勧進(1186)し、その中の「秋二十首」に入撰した歌⁶⁾と説明したもの。「わび」と無縁な^{ことばがき}詞書は無視して、浦の^{とまや}苦屋を「草庵の茶」にたとえるのは無理。(参考文献P.39)

3. 定家の回想『^{しゅういぐそう}拾遺愚草』(1216)

藤原定家の自撰歌集である。『新古今集』(1205)の後十一年目に発表した歌集で、そこに次の歌を残す。⁷⁾ 短い^{ことばがき}詞書に始まる。

時雨知時 私家(自邸での歌会)
いつはりのなき^よ世なりけり^{かんなづき}神無月
たがまことより時雨そめけん — 藤原定家 (拾遺愚草 二三〇五)

この頃の定家はもはや晩年。歌の言葉も懐古調に聞こえる。どうやら定家がようやく世

に個性的な青年歌人と言われ始めた頃から回想するのがわかりやすそうである。

奢る平家から鎌倉幕府へ、伊勢神宮はようやく僧侶たちの参宮を認める中を、宮廷貴族閥は文字通り修羅の妄執。定家の青春時代は下級朝臣の下働き酷使、いつわりの渦中で歌詠力を磨く生活であった。しかし伊勢神宮と賀茂神社だけには斎宮いつきのみやが許されており、その一つ賀茂神社の斎宮式子内親王しよくしは折にふれ、和歌の指導者として定家と呼ばれた。

定家の日誌『明月記』には単に「大炊殿ニ参ズ」と記されたが、この時間が正に定家にとって「いつわりのなき世なりけり」であり、式子内親王にとっても十才下の気のおけない新進歌人を師として、秀歌を作ることができた。十四年に及ぶ師弟関係は一二〇一年一月の内親王死去まで続いている。その前年『明月記』に「大炊殿ニ参ズ」と書かれた回数が増えたといわれるが⁸⁾とかくの噂より、筆者の関心をひいたのは、内親王の病状悪化の時期に神無月や時雨もあったことである。また死別後、約十五年に、定家が「時雨知時」と詞書を添えている点である。「しぐれは時(季)を知る」なのか「しぐれに時(人生)を憶う」なのか。この歌集を出した年の定家は、後鳥羽院の知遇を得、正三位、侍従であり、いつわりのなき世など大嘘と知っていたはず。(斎宮いつきのみやも『古今集』⁹⁾から、一部本歌取した歌を承知か)

したがって、この歌は時雨しぐれのかすかな音を聞くにつれ、ふと、ほぼ三十年昔の、式子内親王の、いつわりのなき世なりという高貴な詩情の後に神無月という冬に入る季を付け次に誰がまことよりと、いわずと知れた当時の自分が斎宮いつきのみやに正直で慎しみ深く傲らずまことを尽くした心の後に、時雨を入れ、よろず斎宮の昔を知る者のわび(古語)にひたる。

この歌は『新古今集』の特徴とされた非実情、懷古鑑賞の歌境を歌う、言葉と感慨の舞姿がみごとである。

「…時雨しぐれそめけん」の誰の「まこと」であるかは当然のこと乍ら、姫の前で、恐懼きょうくし専心これ勤めた自分のことと思える。そのとき、和歌を詠みながら、気になる点があったとすれば、一人涙する姫の心であろうか。雨足は二人の「まこと」を納得させ静かに去る。

4. 三百年後、「紹鷗じょうおう侘の文」(引用文) 定家の歌境を解く

武野紹鷗は『詠歌大概』の写本を、写筆の当人三条西実隆卿から拝受し、個人指導も受けている。在原行平の「藻塩のわぶ」の歌も知っている。『拾遺愚草』を読みあさり、注目の歌を引き出す。紹鷗は最も和歌に詳しい立場にあった。武野紹鷗は定家なき後、和歌の長い混乱停滞の後、定家の心意を継ごうと、敢然として「紹鷗侘の文」を宗易(後の利休)宛に書く。

そこに引用された唯一の歌が前述の『拾遺愚草』の和歌である。

その歌の冒頭二句「いつわりのなき世なりけり…」と定家に回想させた内親王の強い清らかな詩情。これには十数年、和歌の指導に呼びだされたとき、定家自身もその詩情に救われた思い出が重なっていたであろう。しかし神無月(陰暦十月冬の入口)と歌を引き締め、

問わず語らずのうちにこの詩情が詠歌の遠因という自覚を示していた。歌を詠むに当たっての定家自身の、世に流されまいとする、心情の内奥の原因となったと思う。あとは定家が仕えたときの気持、正直、慎しみ、慢心せぬことが思い出される。(参考文献 P. 37 では紹鷗自身の人生観になっている)

ここに問題が生じた。歌で「誰がまことより時雨そめけん」の誰とは定家に限らないという解釈が強まったからである。

しかし三百年前の和歌の中に出た「誰がまこと」は紹鷗自身の「まこと」とは読みにくい。まして紹鷗が注目した名歌を読んだ読者の誰かの「まこと」と解釈し、内容は紹鷗の人柄の高潔さを示すと主張するのは、「紹鷗^{じょうおう}侘^{ママ}の文」を頂いた宗易にとっても偏狭な押しつけとしか思われなと思う。

この点にこだわるのには、次の文章も「侘の文」の重要な内容として「…肝要にて候」とあることに関係するからである。(参考文献 P. 155)

伊勢神宮本殿と供物の、「かやぶき、黒米の御^{そなえ}供…ふるきを不^レ捨、新しきを不^レ求というところ肝要にて候」(参考文献 P. 155)原文は「紹鷗^{じょうおう}侘^{ママ}の文」の後半にある。

「ふるきを不^レ捨、新しきを不^レ求」は平常の言葉の合理性としては矛盾するが、頑固な保存主義に過ぎない。「…肝要な」理由は「根本的な価値観の変化を流行視してよいか。自己反省の手法混乱でよいか。」を反語として示した言葉と思う。実際にも、すぐ続けて、「今さへ古きを求め宝となす風俗にて候へば、なげかわしなげかはし。後代にては影も形もなくなり、あき人(商人)の業になり可申と、いとかなしく候。」と書く。(あき人は、他の「侘^{あま}の文」では海人となっているが、名作の能に「海人」の題を付けたものがあるから、雑業の一つと考えられたと思う。)¹⁰⁾

要するに紹鷗が書いた考えの筋は、侘の茶が雑業に落ち入らないためには、流行とは異なる確りした、侘茶人の拠り所が必要。それこそ、「いつはりのない心」を、紹鷗自身が持つべしと知ったのである。

侘び茶の素因とは、世間に対してではなく、自分自身にいつわらない心だと思う。

謝辞 武庫川女子大学文学部教授・博士(文学)の影山尚之、管宗次両先生から、講演後のコメントとして貴重なご指摘、ご意見を戴いた。この拙論も随所で引き締ったと思う。御礼を申し上げる。また同大学生生活美学研究所森田雅子所長には、筆者の老齢のため特別のご配慮を煩わせたと思う。謝して御礼申し上げる。

【引用文】「紹鷗^{じょうおう}侘^{ママ}の文」冒頭七行(参考文献 P. 154)

侘と云ふこと葉は、故人も色々に歌にも詠じけれ共、ちかくは、正直に慎しみ深くおごらぬさまを侘と云ふ。一年のうちにも十月こそ侘なれ。定家卿の歌にも、

いつはりのなき世なりけり神無月

誰がまことより時雨そめけん

とよみとりけるも、定家卿なればなり。誰が誠よりとは、心言葉も不及処を、さすがに定家卿に御入候。ものことの上にもれぬ所なり。

【注】

- 1) 2008『古今和歌集 新古今和歌集』小学館 P. 33
- 2) 2008『古今和歌集 新古今和歌集』小学館 P. 138
- 3) 2006『歌論集』小学館 P. 486
- 4) 2008『古今和歌集 新古今和歌集』小学館 P. 195-197
- 5) 2008『古今和歌集 新古今和歌集』小学館 P. 35
- 6) 堀田善衛 1986『定家明月記私抄』新潮社 P. 88
- 7) 久保田淳訳注 1985『藤原定家全歌集上巻』河出書房新社 P. 377
- 8) 堀田善衛 1986『定家明月記私抄』新潮社 P. 153
- 9) 2008『古今和歌集 新古今和歌集』小学館 P. 116
- 10) 2005『あらすじで読む名作能 50』世界文化社 P. 62

【参考文献】

戸田勝久 2006『武野紹鷗 茶と文芸』中央公論美術出版

(2015年5月30日、生活美学研究所第1回定例研究会における講演に基く)

コーディネーター 武庫川女子大学生生活環境学部教授 黒田 智子

指定討論者コメント

武庫川女子大学文学部教授 影山 尚之

茶道に心得のないわたくしは不安だらけで臨んだ定例研究会でしたが、ご講話の焦点は古今集から藤原定家にいたる和歌の表現に据えられましたから、すこしばかり安堵しました。と同時に、情熱を注いで語りかけてくださる相川先生のお姿には深く心を打たれました。古典和歌研究者はともすれば対象への愛情を失いがちなのですが、先生は、定家の和歌への専心をご自身のものとして追体験なさり、定家「詞」への執着を現代にも繋がる(繋がるべき)それとしてお説きくださいました。「情は新しきを以て先となし、詞は旧きを以て用ゆべし」の論は、きわめて困難な課題のように映るのですが、先生にとっては、これが単に中世日本の和歌の問題として外部完結するのではなく、ご専門の建築において長年追求なさってきた理念ときわめて近い位置で結び付いていらっしゃるのだな、と、討論を終えたあとで納得しました。

よい機会を与えてくださいましたことにあつく御礼申し上げます。

武庫川女子大学文学部教授 管 宗 次

喫茶の伝来と流布に大きく預かったのは、当時中国でも流行の禅宗であったため、五山の漢詩漢文が文化的文学的な喫茶の世界や理論をつくったことは知られているが、和歌は果たしていかようにいつ頃から喫茶に関わったのであろうか。室町幕府は茶・連歌・能楽・禅を重用したのは公家の家学に属せぬ新たな文化であるからである。茶道も公家衆の嗜むにあたり、公家文化・武家文化の両様が和歌でなされ、和歌伝書の基本理論が転用されている。